

国語力

2023. 11. 13

「一に国語、二に国語、三四がなくて、五に算数」とおっしゃった方がいる。お茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦先生である。『国家の品格』の著者でもある。藤原先生は、この言葉を通じて、人間のすべての基盤が言葉にあることを示唆されている。言葉をしっかりと理解し、自分の中にきちんと収め、活用していく国語力を養うことは極めて重要である。未来を担う子どもたちが、しっかりした国語力を身につけることが、何より日本という国のベースになる。

ところが、日本の子どもの国語力は低下し続けている。OECDの国際的な学習到達度調査であるPISAの結果を見れば、それは明らかである。これに比例しているかのように、世界における日本の存在感も低下し続けている。

読解力のある側面から考えてみる。それは、今、自分が直面している事態を的確に把握し、それが意味するものを汲み取る力である。だから、政治やビジネスの現場に読解力の乏しい人が、いくら集まっても、お互いの意図を十分理解することができないため、コミュニケーションの質は高まらず、何ら発展的な成果を上げることもできない。

今の学校には、こうなるであろう萌芽が見られる。コミュニケーションが成り立たない場面が増えている。日本人の国語力の低下は、極めて深刻な脅威であり、国を地盤沈下させる重大な要因となる。

学校の先生は、全国学力・学習状況調査などの結果は気にするだろう。あれは、日本国内での話である。問題は、国際社会における日本人の国語力である。学校の先生も、文章が読めない、文章が書けない、発表ができないなど、子どもたちの実態から、何かは感じているだろう。これらが、国語力低下の元凶である。これを国語の授業を柱として何とかしなければならぬ。

読書をする、音読をする、視写をする、文章を書く、漢字を覚えるなどの量が圧倒的に少ない。名文を読み、それを視写する。繰り返し繰り返し音読する。毎日のように文章を書く。これらは、やる気になればできることである。いつの間にか、これらのことをやらなくなってきた。量の減少とともに質が低下している。

もし、チャンスがあれば、小学生の作文指導、中学生の作文・小論文指導、高校生の小論文指導をやってみたい。文章力は、なかなか上がるものではないと思われているかもしれない。実際は、違う。メキメキと上がる。書けば書くほど上がる。ただし、ただ書けばいいというものではない。書かせ方がある。そのことを、中学校での小論文指導の経験から学んだ。

音読ならば聞いていればわかるが、内容理解のための黙読になると、評価できない。話すことも残らないので評価がむずかしい。それに対して、書くことは残る。書いたものを通して指導できる。前に書いたものを取っておき、比べることで自分でも文章力の向上を自覚できる。子どもたちを救うための国語力育成を書くことから始めたい。